

国定読本の編集

はじめに	5
一、吉岡読本とその功績	5
二、芳賀読本の特色	12
三、「尋読」と「国読」	18
四、サクラ読本のできるまで	29
五、サクラ読本の出現	37
六、国民学校の国語	57
七、戦時下における国定教科書編纂事情	66
読本編修三十年	
一、恩師に叱られる	88
二、そのころの読本編修	90
三、読本編修の史的展望	95
四、新編算法を求めて	103
五、サクラ読本成る	107

六、国民学校教科書事情	110
七、国語教育の行くえ	114
八、太郎花子国語の本作成	120
小学読本編纂史	

序説	125
----	-----

第一期 編纂準備時代	127
------------	-----

前期 明治五年から同十二年まで	127
-----------------	-----

後期 明治十三年から同十八年まで	136
------------------	-----

第二期 編纂確立時代	146
------------	-----

前期 明治十九年から同三十五年まで	146
-------------------	-----

後期 明治三十六年から昭和七年まで	167
-------------------	-----

附記

転換期 昭和八年以後——小学国語読本の出現	185
-----------------------	-----

年譜・執筆教材目録	195
-----------	-----

校訂付記	203
------	-----

解説(古田東朔)	206
----------	-----

えられます。

二、芳賀読本の特徴

第二回の国定読本は、芳賀矢一、乙竹岩造、三土忠造の三氏を起草委員とし、高野辰之氏を委員補助として作成された本ですが、芳賀先生が名実ともにもっとも編集に力を注がれたことは、当時も周知のことですから、仮りに芳賀読本と申しましよう。やはり黒色のラシャ紙の表紙で尋常（高等）小学読本といいました。

実は、第一回の吉岡読本の修正事業が、早く文部省内で始まり修正原稿も次第に出来つつあったが、明治四十年三月小学校令が改正されて、尋常小学校六カ年の年限が義務教育となったこと、四十一年九月には明治三十三年制定の字音仮名遣および漢字等に関する規定が削除されて歴史的な字音仮名遣が復活すること等があったため、芳賀読本の編集は予定よりも次第におくれ、

その実施も四十二年に至って実現したことが趣意書に書いてあります。

さて芳賀読本は、吉岡読本の語法構成主義を全然否定するものではないが、文法学者の工夫作成した教材や、その配列が不自然であり、また文学趣味を犠牲にし、児童自然の言語と隔たりがあるという見地から、吉岡読本の行きすぎを是正緩和するといったことが、根本方針の一つになつていようであります。そこで巻一巻頭は、イエスシ式の発音教材を廃止して「ハタ」「タコ・コマ」「ハト・マメ」「コトリ・タマゴ」といった、いわゆる範語に置きかえられ、範語から句・文といった方法が採られました。これは明治十九年文部省の読書入門以来の方法にかえつた



第四図 文部省「尋常小学読本 巻一」(明42)

わけですが、しかし、範語や句のページの多いことにおいて、その後に出た民間読本（ことに明治三十

年の初ごろ）に極めて接近しています。

芳賀読本は文学読本だという世評が、当時すでにありました。それは吉岡読本の言語主義に対し、当然いわれるべき批評でありそして当時好評を得るゆえんでもありました。しかし、単に文学読本といて妥当であるかどうか。吉岡読本に比べてたしかに興味感情も豊かであり、文章の表現における芳賀先生のご苦心もいろいろ伝え聞いていますが、芳賀先生のねらわれたものは、もう一つ奥にあると私は思います。

芳賀読本を通観して感じられる特色は、単なる文学読本でなくいわば国民文学読本、もつと極言すれば国民思想読本といった趣きがあります。一つ一つの素材の選び方なり、表現なりが、国民の思想精神を啓培することをもって目標とされている。これは吉岡読本と比較して、特に注意される点であります。

まず、数多くの日本童話、伝説、神話、史的人物、特に皇室を中心とする忠臣、孝子、英雄、賢女、才女、文化的偉人等が読本教材の根幹となつています。しかし、一面から見るとこれらは、あえて芳賀先生を始めて始めて教科書に選ばれたものではありません。明治二十年から三十年にかけての民間読本を通観すると、こうした種類の教材は、ほとんど出尽くしているといった感じがあります。芳賀読本巻一に「キクノゴモン。キリノゴモン」というのがあつて、いかにも芳賀先生らしい教材だと思つてみると、あにはからんや、坪内雄蔵氏の読本巻一に、「キク。キリ。」というのがあつて、それからの脱化かと思わせます。その他、政治、経済、実業、軍事をはじめ、三大節、国祭日、また「日本三景」とか、「近江八景」とか、「箱根山」とか、あるいは「吉野山」「大和巡り」といった伝統的な景観、古典、歴史と深い関係のある地誌的教材に至るまで、すでに民間読本の教材として出